ブラジル国立バイア大学アジア・アフリカ研究所

Centro de Estudos Afro-Orientais da Universidade da Bahia

I

ブラジルの旧都サルバドール市の閑静な住宅街にある，一見してそれとわかる植民時代スタイルの古風な邸宅の中で，日本を含むアジア・アフリカの地域研究が地道に行なわれている。ブラジル国立の機関としてはまったくユニークなバイア大学付属アジア・アフリカ研究所がそこで活動を続けているのである。わたくしは1961年9月から1962年8月までの1年間，バイア大学経済学部に学ぶ機会を得たが，その間求められて約半年，同研究所の日本経済および日本文化研究に協力したので，簡単に紹介をしよう。

II

この研究所の歴史はそれほど古くはない。1959年8月バイア大学の主催で，ブラジル問題研究会が開催されたが，その際，当時の文学部教授 George Agostinho da Silva の提案が同年9月実現されて，独立した研究所となったものである。

なぜブラジル問題からアジア・アフリカ研究の機関が生まれたかは，ブラジル文化の背景を思えばすぐ理解できることである。ブラジルはポルトガルを中心としたイベリヤ半島のラテン民族の植民地であった。しかし，16世紀から18世紀の砂糖栽培および17・18世紀の金鉱開発の時代に，ポルトガル領アフリカから多数の黒人奴隷を移入して労働に従事せしめた。ある時代には，このため黒人の全ブラジルに占める人口比率が白人より高いほどであった。そしてアフリカ人の血と文化とはスペイン・ポルトガルのそれと混じり合って一種独得の人種と文化を形成し始めた。これが社会学者 Gilberto Freire がその著書 *Casa Grande e Senzala* で述べているように，ブラジル的なものであって，ブラジル問題を文化的，社会学的に解明しようとするとき，忘れてはならないことなのである。そしてアフリカ文化の影響の最も著しい地域がこのサルバドール市を首都とするバイア州なのである。

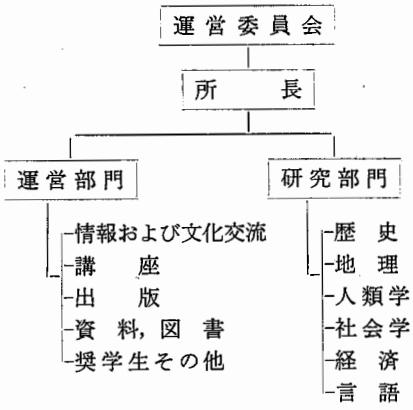
アジア研究については，アフリカほどの親近感はない。しかし，ブラジルと日本とは移住者を通じて50年来のつながりがあった上に，当時サルバドール市郊外に大規模な農業開拓地ができ上がりつつあったことが少なからず研究所設立の動機となったようである。

III

設立の目的は，アジア・アフリカ諸国についての研究，教育，文化交流を行ない，これらの国々との関係に役だつ専門家を養成することである。そのため，(a)アジア・アフリカの地域研究に必要な資料を整備し，(b)知識の普及のための出版，講演，展覧会，映写会，記念祭，演劇祭等を行ない，(c)これら地域の事情や言語教育のための大学院講座を含めた講義を行ない，(d)専門の研究を行ない，(e)アジア・アフリカの大学と交流を持ち，講師を交換し，(f)アジア・アフリカ諸国においてブラジル文化についての知識を普及し，(g)大学・高校教育におけるアジア・アフリカ学習を促進する，等の活動を行なうこととなっている。

IV

研究所の組織は次の図のとおりである。



運営委員会は研究所経営の最高機関で，バイア大学長，研究所長，文学部代表，経済学部代表で構成される。運

営委員会は，所長を任命し，予算および活動計画を審査する。

研究所の実際の運営は所長に任せられている。所長は活動計画，予算案，人事に関係ある事項について委員会の承認を得るほかは，研究所を代表し，各部門の調整を行なって，研究を指導する。初代の所長は創立者 Agostinho da Silva 文学部教授であったが61年に転出し，現在は2代目で Waldir Freitas Oliveira 経済学部教授が采配を振っている。

Oliveira 教授は文学部出身。ソルボンヌで経済地理を専攻した優秀な若手教授の1人である。アフリカ研究には非常な熱意を持っていて，1962年にはブラジルで初めて多数のアフリカ人留学生を招き，教授の交換を実現するなどして，活躍している。学生の頃，かなり知られた学生運動のリーダーであったそうで，時折，非常に頑固な民族主義者ぶりを示すことがあるのと，アジア軽視のふうがあることが気になるが，有能な指導者である。

V

情報および文化交流担当部門は渉外，対外的文化活動，外国との交流による知識の普及に努めている。この部門では不定期の集中講義や外国の記念日を利用した外国紹介の行事を主催したり，外国の大公使館，研究機関との接触を保っている。たとえば，外国の大使館から文化担当の書記官を招いて，その国の文化史の講座を開く。また，一国の独立記念日にその国についてのあらゆる資料やコレクションを動員し，語劇等を加えて盛大なお祭りを催す。公館から借り出したフィルムによって，公開の映画の会を開く。1964年および1965年には，「日本週間」もあって，それぞれ大使および総領事が出席している。さらに最近は東京オリンピック写真展が行なわれ，市民の好評を博したと伝えられているし，来る3月には日本版画展が予定されている。

講座担当部門は，語学・文化の定期公開講座を開設して，アジア・アフリカ地域に対する一般の認識を高めるのがその役割である。現在までにヨルバ語（ナイジェリアを中心としたアフリカ土語），アラビア語，ヒンズー語，ロシア語，日本語，ヘブライ語と2，3の国の文化講座が開かれた。日本語およびヘブライ語講座はずっと継続して持たれている。

出版活動はあまり活発とはいえない。まず第1に，必ずしも規則的に出てはいないが，定期刊行の機関紙として，*Brazilian Report*（英文）と *África e Ásia*（葡文）がある。両者とも研究所の活動を示す簡単なビュレティンである。しかし，今年3月からは，研究雑誌 *Afro-Asia* が，半年ごとに定期的に出ることになっているので，同研究所の研究成果を知るよい手がかりとなるであろう。他に次の単行研究シリーズが出ている。(1) Waldir Freitas Oliveira, *Importância Atual do Atlântico Sul.* (2) Clarival do Prado Valladares, *Origem, Revelação e Vida de Um Escultor Primitivo.* (3) Oscar Ribas, *Carta Organização de Unidade Africana.* (4) Oscar Ribas, *Usos e Costumes Angolanos.* (5) A. S. Ayad, *A Civilização Árabe.*

資料図書の整備は必ずしも十分ではない。主として外国公館から寄贈される図書が多くを占めている現状である。しかし関係者の不断の努力でしだいに良い資料が集まるようになってきている。日本関係では，最初，たぶん São Paulo 辺の篤志家の寄贈によるものと思われる新興宗教等特殊の図書が大半であったが，その後，Rio de Janeiro の日本大使館の協力でかなりたくさんの本や雑誌が集まるようになった。また神戸大学と一橋大学の研究誌が2，3散見されていた。このほか，東京外国語大学とは，1963年の小川学長が同研究所訪問の際，図書交換の約束を結んでいる。

VI

研究部門は非常に大きな自治の権限を与えられて，自由なうちにも真摯な勉強を行なっている。

たくさんの部門のうち，人類学的研究および社会学的研究は比較的新しく，歴史と地理研究が古い。これら各部とも，バイア大学各学部の若手助教授クラスを招いて特に企画のないかぎりは，それぞれ自由にテーマを選ばせて研究させているのである。

最近の活動を不幸にして聞いていないが，一時，経済部門は日本経済研究に大変な熱の入れようであった。当時主任研究員はバイア大学卒後，New York 大学に2年学んで Business Cycle を専攻した Paulo Rebouças Brandão 経済学部助教授であった。1962年かれはブラジル経済開発の問題と取り組んでいるうちに，日本経済の発展過程から学び取れるものがたくさんあるのではないかと考えるに至った。明治以来の貿易構造の変遷，インフレーションと工業化の過程，戦後の高度成長等，ブラジルの直面する問題をとく鍵を求めて，かれは助手の学生，秘書を動員して半年くらい，資料集めと基本的な数表やグラフを作った。そして1963年には，日本大使館の

好意あるはからいで約半年間，日本に留学し，日本の経済発展をテーマに勉強してゆくに至った。Brandão 助教授の研究所での研究テーマは，(1)日本の工業開発と外国貿易，(2)1950～61年における日本の外国貿易の発展，(3)日本における外国資本，(4)短期および中期的に見た日伯経済の補完性，であった。その後同助教授が経済学部専任となって，後任が日本経済研究を続けているかどうかは聞いていないが，少なくともかれの手がけたのは，ブラジルでは最もアカデミックな日本研究の一つであったと言えるであろう。

Ⅶ

アジア・アフリカ研究所は午後だけしか研究をやっていない。赤いカンナの花の咲くスペイン風の前庭と，うっそうとマンゴーの木の繁る裏庭にはさまれて，白亜二階建ての研究所は，南国の午後の太陽の下で静まり返っているのが普通であった。階上の研究室はけっして広くはないが，涼しい風がよく通って，時折混血の用務員が運んでくる小さなカップの濃いコーヒーが，この上ない覚醒剤 (refreshment) であった。

研究所の所在地は次のとおりである。

Prof. Waldir Freitas Oliveira
Centro de Estudos Afro-Orientais da Universidade da Bahia
Avenida Leovigildo Filgueiras, 69
Garcia, Salvador, Bahia, Brasil

（東京銀行アメリカ部　小林利郎）

ラテン・アメリカ自由貿易連合

―― 調査研究双書　第123集 ――

大原美範 編

第1章　LAFTA 結成の背景 ……大原美範
――ラテン・アメリカ経済統合の動き：ラテン・アメリカ経済統合の阻害要因：ラテン・アメリカ経済統合の促進：ラテン・アメリカ諸国の経済発展段階の相違――

第2章　LAFTA の結成過程と組織 ……水野一
――結成過程：組織――

第3章　LAFTA の発展と問題点 ……水野一
――発展経過の概要：貿易自由化計画：相互補完協定：その他の活動：問題点――

第4章　低開発地域における経済統合理論 ……松浦保
――問題の提起：経済的利益の条件：規模の経済：交易条件の改善と安定：競争力：統合と経済発展：問題点：ラテン・アメリカへの適用――

第5章　国際経済における経済統合の意義〈先進国の経済統合と低開発国の経済統合の比較〉 ……松浦保
――先進国経済統合（特にEEC）とその効果：南北問題と経済統合――

第6章　LAFTA 域内の先進国
メキシコ ……水野一
ブラジル ……西向嘉昭
アルゼンチン ……細野昭雄

第7章　LAFTA 域内の中進国および比較的低開発国 ……大原美範
――太平洋岸の中進国および比較的低開発国（コロンビア，ペルー，エクアドル，チリ）：ウルグアイおよびパラグアイ：南米の未加盟国（ベネズエラ，ボリビア）――

第8章　域外諸国の LAFTA との関係 ……神尾昭男
――LAFTA に対する欧米諸国の態度：LAFTA の域外貿易への影響：LAFTA と外国資本：LAFTA と中米共同市場――

第9章　わが国の LAFTA 諸国との貿易 ……稲垣邦人

結　語 ……大原美範